

都市と山村 — 独善の彼方に

末 田 達 彦*

1. 都会人の森林知らず

一昨年の夏、カナダ北部の森林へ調査に行った。現地へ着いて数日後、地元の新報に「日本から森林調査隊到着、都会人ばかりにつき、まずは町営キャンプ場にてキャンプの練習中」と書かれてしまった。平均的な日本人に比べれば格段に山慣れした林学科の大学院生を連れて行ったにもかかわらずこの始末である。こうした自らのハジをさらすまでもなく、現在の日本ほど自然との対話が欠落した国も珍しいし、わが国の歴史を振り返っても現在ほど自然との対話が欠落した時代も珍しい。

もう五～六年ほど前の事、京大の四手井先生を中心とした「森林環境に対する住民意識の国際比較」という研究があった。これは、日本とヨーロッパ諸国で同一内容のアンケート調査を行い、口欧の対比から日本人の森林観を探ろうというもので、難解をもって尊しとする従来の林学の研究とはかなり趣を異にしている点でも面白かったが、調査の結果はさらに含蓄に富むものであった。すなわち、多くの日本人が言語による質問に対しては「天然林が好き」あるいは「大切」と回答している反面で、写真による選択では「好ましい自然」として、整然たる人工林の風景を選ぶという自然に対する無知をさらけ出したのである。平安の昔から借景という世界にもたぐい希なる造園概念を発明して自然にとけ込む努力を重ね、現在でも“アウトドア”好みを白認する日本人として、この理念と現実の矛盾はお恥ずかしい限りであったが、日本人の自然知らずや森林知らずはこの時すでに時代の潮流となっていたのである。また、こうした森林に対する概念と認識の断絶は大都会の住人ほどはなはだしいとの事だったが、こうした傾向が現在さらに強まっていることは想像に難くない。

都会人が忘れてしまったのは森林だけではない。林業も山村も忘れてしまった。日本人の大半がヒノキを世界でも有数の建築材と信ずる一方で、実物の材を見てヒノキとダグラスファーを区別できる人が少数に過ぎないことは日常茶飯の経験である。名大林学科に関する限り、昨今はスギとヒノキを識別できる学生が半数いれば有難いことだし、教えずしてナタの使えるほど林学的な学生は皆無に近い。

2. 材価の低迷とその恩恵

このような次第につき、もう少し込み入った問題、例えば木材価格の低迷、山村の人口流出、雇用不安等々は都会人の大半にとって他国の話に近い。もちろんこれらが山村にとって死活問題であ

*名古屋大学農学部

ると心得ている人もいないわけではない。しかし山村にとって問題なのは、そういう人々も山村にとっての死活問題を日本にとっての死活問題とは考えていないことであろう。先日コメの自由化についてさる良識ある企業家と話していたときのこと、話題が林業に飛火するや言下に「木材輸入が自由化されているから日本の森林が守られている」と言われてしまった。残念ながら事実はその通りで、企業にとってはもちろん国民一般にとっても、ここ数十年木材輸入が自由化されてきたことは百利あっても一害すら無いように思われる。

こうした恩恵は様々な方面におよぶが、まず木材価格について「外材に引かれて国産材の材価が低迷している」というのは林業側の見解にすぎず、消費者の側から見れば、木材にしる何にしる物価は安いにこしたことはないのである。また企業にとっても、目下のところ外貨は有り余っているからその手当に関し何の心配もなければ、外材の供給面での不安も皆無である。例えば主たる外材供給地のひとつアメリカ西海岸は、南部のサザンパインに押され東部市場から駆逐され、日本への輸出依存度を高めている。アメリカにとってはこうした弱みがあるにもかかわらず、日本は国内材が高いため、依然有利な市場である。さらに国家的な見地からすると、木材輸入の増大は日本にとっては貿易黒字の、アメリカにとっては赤字の軽減につながるという利点も重要である。

材価低迷の反動として国産材が伐り控えられてきたことは、ここ数十年来全国森林計画において常に伐採実行量が計画量を大幅に下回ってきたことから明らかである。ひと昔前は外国から帰ると日本の森林がひときわ貧相に見えたが、昨今はそうでもなくなった。つまり伐り控えの結果国内の森林蓄積は年々増加の一途をたどり資源状態は目に見えて改善されている。こうした森林蓄積の増加は、国土保全、保健休養、水源涵養、いずれの面からしても望ましいことである。

樹木が大きければその根も深いという単純な相対生長関係からしても、蓄積の高い林は山崩れや地滑りに強く、それ故土砂流出防止機能も高いことは容易に察しがつく。また高齢の天然林の風貌が優れていることは論を待たないが、人工林でも高齢になれば、それなりの風貌を備えてくるものである。景勝地として誉れ高い上高地小梨平のカラマツ林は大正期前後に植栽された人工林である。従って都市の住人にとって人工林の伐り延ばしとは、極論するならば、上高地が近所に引越してきてくれるようなものである。

水源涵養機能は基本的には岩盤上の土壌の厚さ、とりわけ根圏の厚さとその空隙率によって決まる。従って森林が高齢、高蓄積になればなるほど、根圏は深くなり、樹根や土壌動物による生物耕耘の履歴も増すので保水機能も高まる。飲料水から工業用水まで基本的にはすべての水資源を森林からの遅延流出に頼っている都市住民にとっては、これまた伐り延ばしの恩恵である。このようにわが国が木材輸入の自由政策をとっている限り、「風が吹けば桶屋が儲る」式に、下流すなわち都市には有難いことしか起らない。しかも、そのありがたみは単に桶屋だけではなく、ネズミ算的に都市住民一般におよぶのである。

残念ながら国外の環境を概観しても当面国産材の価格を引き上げるような要因は何一つ見あたら

ない。わが国の三大外材供給元のひとつアメリカ西海岸の事情についてはすでに述べた。残り二つのうち、ソ連でも対日本材輸出意欲は増大している。第一の理由は御存知のベレストロイカ・グラスノチ・デモクラティザツィーヤである。これらの政策が目指している国内再開発にあたっては、西側諸国から技術導入のための外貨が必要である。第二の理由は、バム（バイカル・アムール）鉄道の開通である。新聞等の報ずるところによれば、開通はしたものの人口が希薄すぎて事前に宣伝されたほどの経済効果は上がらず、大方の不評をかこっているとのことである。そうした中でいくばくなりとも手近に経済効果をあげうる途は、新線沿線の処女林伐採であるが、それに最も近くて大きな市場が我国である。米国政府の「木材需給の長期見通し」でも日本市場における潜在的ながら強力な対抗馬としてこのシベリア森林資源を取り上げている。最後に南洋材だが、かつての勢いこそなくなったが、マレーシアのサバ、サラワク、インドネシアのカリマンタンにはまだまだ莫大な森林資源が残されている。目下のところ付加価値を高めるため原木輸出から合板等の製品輸出に切換えられつつあるので、輸出の漸減傾向は続くものの、それだけに息が長くなることが予測される。

3. 山村の独善

何故こんなことになってしまったのか。直接の原因は戦後の高度経済成長の端緒における木材輸入の自由化である。しかし貿易や通商の自由化は、1488年にバーソロミュー・ディアスが喜望峰を回航して以来、終始一貫した歴史の潮流であり、今日のわが国の繁栄もそのためなのだから、輸出入の自由化自体に日本林業の衰退や、山村問題の責を帰すのは、時代錯誤どころか、歴史錯誤というものである。真の原因はもっと些細で国内的なことだが、これについては山村も都市も相応に反省すべき点があるように思われる。

まず山村側の問題として、封建時代以来の偏狭な独善があるように思われる。先にもふれたが近年外貨事情が劇的に好転するまで、古来わが国において木材は慢性的不足物資であった。畿内では安土、桃山の昔から木材不足をかこっていた様子が筒井先生の著書に詳しい。名古屋では江戸初期に薪が不足し、木曾から薪を運び込んだ角倉に尾張藩が報奨金を与えたという記録もある。こうして史的な重みすら備えるに至った慢性的木材不足が、わが国の林業界に「木材は放っておいても欲しい奴が頭を下げて買いに来るもの」、「多少値が下がっても待っていればまた反騰する」というメンタリティを深く刻み込んだ。今日なお、材価の低迷が森林経営の合理化や生産性の向上に向かわず、外材の責に転嫁され、伐り控えに向かうのは、意識的にしろ無意識的にしろ、こうしたメンタリティの反映に他ならない。

現代の産業の中で日本の林業ほど生産性の低い産業も珍しい。物質文明そのものの良し悪しは別として、現代の生長産業の要件はより良いものをより安くより大量に供給し得ることである。電化製品然り、クルマ然り。特にコンピューター関連産業ではこうした傾向が著しい。だが少なくとも

現象的には、林業では太古の昔と変わらぬものを小出しにすることにより値を釣り上げようとしているとしか思えない。国産材の高級化志向も当面は結構かも知れないが、こういうことを続けていればかって鉄やコンクリートにシェアを奪われたように、さらに徹底的に外材にシェアを奪われてしまうであろうことは目に見えている。高級化とは美術工芸品化であり、産業としては衰退以外の何物でもない。周知のようにウェアハウザー社はアメリカでも最大手の林業会社であるが、数年前講演に来日した同社の副社長は「日本の森林はすべて国立公園にして下さい。木材はすべてアメリカが供給致します。」とのたまった。

アメリカ西海岸において原生林が伐り出されているうちは、それが投下資本タダの木であるだけに「外材に引かれて材価が低迷」という理屈もそれなりに説得性を持っていた。ところが先述した西海岸材を駆逐している南部のサザンパインは人工植栽されたものである。もうひとつ例をあげるなら、ニュージーランドはたかだか国土の5パーセント、100万haに集中させた人工林から年1000万立米の木材を生産している。しかもこれがあと十年足らずで生産2000万立米、二一世紀初頭には同3000万立米に達すると予想されている。ニュージーランドがわが国に熱い視線を送ってくるのは同国の出材量が消費量600万立米をはるかに上回るからである。国土の68パーセント、2500万haの林地から年3000万立米しか生産していないわが国と比較して頂きたい。岐阜シンポの後ニュージーランドで行われた林学関係の学会でブリテッシュ・ペトロリアムの重役に会った。世界の大石油会社と林業の関係についていぶかる向きもあろうかと思うが、本人の説明によるとBPは積極的に林業に投資している。ニュージーランドの林業生産性は極めて高いので、資本さえあれば、林業的には皆無の状態から土地を買って木を植えても、50年後には完璧に黒字になるとのことである。

世界の趨勢がこうした方向に動いている以上、今後ますます「外材が安いのではなく、国産材が高すぎるのだ、そしてそれはわが国の林業の生産性が余りにも低いためである」という認識は強まって行くだろう。

4. 都市の独善

都市側の問題として、まず森林及び自然にたいする無知と無関心があることは、冒頭で述べた通りである。これに加えて過去に対する無知と無関心もはなはだしい。半田先生が言われたように明治以来の我国の近代化政策は農山村の収奪のうえに押し進められたものである。特に近代化の揺籃期、勃興期にあっては、人的資源という点においても物質的な資源という意味でも農山村からの収奪には目を覆うものがあつたことは女工哀史などを引合いに出すまでもない。西欧諸国から近代技術を買うための代価となった絹は、悲劇の主人公女工から、カイコのエサの生産性を維持するために桑畑に投入された莫大な量の木灰に至るまですべて山村と山林に由来するもので、いわば山の富の結晶である。木材については言を待たない。占米、木材資源の不足に悩まされてきた我国から、加工度の低いものでは家具材として広葉樹原木が、加工度の高いものではイギリスがインドから世

界各国に輸出する紅茶梱包用の茶箱に至るまで様々な形で木材が外貨獲得のために輸出されたが、これもまた山村の犠牲のうえになされたものである。

絹のような悲劇性もないし、木材のように直感的に森林に結びつきもしないので目立ちにくいだが、森林から供給される水資源無くしても日本の工業化、すなわち近代化と都市化が不可能であったことは多くの識者の認めるところである。明治以来一世紀にわたり我国の産業の基幹を成していた製鉄業では1トンの鉄を作るのにその10倍前後の真水が必要であり、現在鉄に代わって産業のコメといわれているICのチップを作るにはさらにそれを数倍した真水が必要である。昔も現在もすべての産業と文化を支える紙もまた水と木を主原料とした産物である。森林が産み出す水なくして現在に見る近代産業の隆盛も不可能であったことは、石油がタダでかつオイルダラーという資本にあふれた中東・中近東諸国で依然遅々として工業化が進まず、他方石油は言うにおよばずその他大半の高価な資源を世界中から遠路はるばる運んできた日本の工業が隆盛を極めていることから明らかである。平たく言えばタダの石油を使って中東の砂漠へ水を運ぶより、高い石油や鉄鉱石を買いそれを日本まで運んでもタダの水を使う方が経済合理性が高いのである。このことは自らの勤勉さに対する日本人のナルシズムの陰に隠れて見落とされがちであるが、勤勉さや中曽根前首相だけが認め世界が猛反対した民族としての優秀さなどより、限りなくタダに近い水の存在の方が日本の近代化に果たした役割は大きい。

5. 双方の独善と腐れ縁

水資源に関する限り、明治以来の収奪が今日も続いていると言えないこともない。すなわち、自分の山から流れ出し目の前を流れてゆく河について山村住民には何の裁量もなく、それが水利権という名の明治以来の既得権益のもとに都市と下流に供給されていることである。もし今仮に、国土の70%近くを占める日本の山村部が日本国から独立して、USAならぬUSS (United States of Sansons)あるいはUSI (United States of Inakas)を建国したとすれば、木曾川、利根川、淀川などの水はリッター百円のガソリンとまではゆかないにしろ、バレル十数ドルという原油並の価格で売れることは間違いないし、OPECならぬOWEC (Organization of Water Exporting Countries)なる輸出カルテルを組めば川下国あるいは都市国に水ショックを引き起こしバレル30ドルあたりまで大巾値上げすることも可能である。しかも森林の保水能力は人工林より天然林、若齢林より高齢林の方が高いのだから山の手入れなど一切する必要もない。現在ある一千万ヘクタールの人工林も放っておけばそのうち天然林化してさらに理想の状態に近づいてゆくことから、下刈も間伐も一切不要、寝て待つだけでウォーターダラーが転がり込むという次第である。

現在の跡継ぎ不足、嫁不足、材価の低迷、雇用不安、集落崩壊の危機、エトセトラ、エトセトラと比べれば夢のような話ではないか。イエス、これはしょせん夢である。夢が現実とならないのは基本的には農山村の人材不足であり、その中でも最たるものが政治家の人材不足であろう。もちろん

ん見方によっては農山村議員の先生方は立派である。並の人間にとっては明らかに憲法違反と思われる議員定数の不均衡に長年ホオかむりしてきたあたりはなかなかのタヌキだし、最近では最高裁をして3対1の定数不均衡を合憲と言わせるあたりも大した政治力である。先生方が国庫から持ち帰る地方交付税は言うにおよばず、種々の補助金も、農山村部のGNPすなわち日本経済への貢献度の低さを考えれば大した交渉力のたまものである。

しかし最近の米価交渉や、コメの自由化に関する対米交渉はちょっといただけない。大きいのは声だけで、交渉は及び腰だし、とりわけ論理とか説得性という点ではカラキシ頼りない。そういえば少し前には林業でもミスがあった。もっともこれは林野庁にやらせたことで先生方が直接手を出したわけではないが、あの水源税はまずかった。天然林の方が水源涵養機能が高いというのに、山の木を伐ったり植えたりしてやるから金を出せというのはいかにも非論理的である。山に木を植えてやるから金を出せというためには、まず山を丸裸にして大洪水と大渇水を起こすことが事の順序というものである。そのためには、材価が安いなどと悠長なことを言っていては話にならん。たとえ二束三文になろうとも山はバンバン伐り、客が来ようが来まいがゴルフ場でも作りまくって表面流出を増大させ、山地の保水能力を極度に落とすべきである。しかしこれでさえしよせんは日本国というワクの中での話に過ぎない。この程度のことでアドバルンも上げられなければ、ハタも振れないような先生ばかりでは、やはり日本国からの独立なぞ夢のまた夢である。

6. まじめな話

まじめな話、都市でもなければ山村でもないという第三者的な立場が許されるならば、かくも穿った悪い冗談を言いたくなるほど、都市と山村相互の既得権益は錯綜し、固定化し、形骸化してくる。岐阜シンポでは講師の先生の大半が言葉を変え、表現を変えて、都市と山村、下流と上流の交流を説かれたが、まさしくその通り、この腐れ縁を正常な夫婦関係に戻すには真摯な対話しか途は無い。しかも、現状が経済的には都市に有利な情勢にあるだけに、山村側からの積極的な働きかけが重要である。

紙数が尽きたので詳しくは別の機会に譲るとして、具体的には全国の中学校と高等学校の半数を都市から山村に移すこと、及び文化人の山村定住化を提案したい。前者は、現在でも一部に行われている林間学校を長期化したものである。青少年の教育にとって自然に恵まれた環境に優るものは無いし、ある期間親元からはなれて暮らすことは人格形成にとってもきわめて有益かつ重要なことである。後者は、これまできわめて希だった山村からの発信を増すことを目的としている。田舎に住む文化人がいかに有効かつ普遍性の高い発信をするかは、世界的な例ではルソー、フェーブル、ソローを、卑近な例では黒姫の C. W. ニコル氏、高山のオークピレッジ等々を思い出していただければよい。